

活かす通信

2021年12月 (173号)

<http://www.toushi-club.com>

★★

巻頭言

元時事通信記者 篠田憲明

関心薄い立民代表選挙より、「緑の狸」と「維新」の動静

★★

「政権交代」ではなくて「野党内交代」選挙だった第49回衆議院総選挙が10月31日に行われ、自民・公明の与党が合わせて300近い議席を獲得し勝利した。自民党は公示当時の276議席から15議席も減らしたものの、過半数(233)はおろか、261議席の絶対安定多数をも確保し、3議席増の公明党を合わせると293議席を占め、大きく減らすのではとの事前予測を裏切った結果となった。一方、大きく伸びるのではとの予測もあった野党第一党の立憲民主党は議席を減らし110議席から96議席まで落ち込んだ。その責任をとり枝野幸男代表は辞任し、今はその後任を決める代表選挙真っ最中である。立民の代表選挙には4人が立候補して今月30日に投開票が行われる運びだ。19日にスタートして4人が立候補しているが、どうも国民の関心は薄いようだ。その代表選挙の討論や主張を聞いてみると、4人とも理想論ばかりであり、誰が代表になろうともその再生の道は険しいと言わざるを得ない。

それよりも先月27日に過度の疲労を理由に2回目の入院、都知事不在のままの“緑の狸”こと、小池百合子東京都知事の動静の方が興味を惹かれる。小池氏は総選挙前に側近の荒木千陽都議が小池氏の意向を受けてか「ファーストの会」を創設し、国政進出への意欲を見せたが、候補者の擁立は断念した経緯がある。言わば今回の総選挙で10議席から41議席にまで勢力を伸ばした「日本維新の会」の東京版である。これには、維新と同様に勢力を伸ばして11議席とした国民民主党の玉木雄一郎代表が秋波を送っているとされる。来年の参議院選挙には「ファーストの会」が動き出すかもしれない。

また維新の会は大きく議席を伸ばしたが、実は2012年「日本維新の会」として国政初進出時は54議席も獲得した。しかし、中央政界は所詮「ローカル政党」と見ている。代表は松井一郎大阪市長で国会議員としては片山虎之助齋院議員が共同代表である。しかし、コロナ禍が早期に収まれば吉村大阪府知事にトップ

交代、来夏の参議院選挙か次の総選挙に出て国政をかき回すのではないかと推測されている。今回「新人議員が当選当日 1 日で文書通信交通費月額 100 万円を貰うのはおかしい」と日本維新の会が噛みついたのはクリーンヒットだ。過去何回となく指摘されていたことであるが、国民目線での維新の会の指摘に既存の与野党とも一本取られた格好だ。(憲)

★★

勝池レポート アジア資産運用アドバイザー 勝池和夫

「日本株、アメリカ株、インド株」

★★

今年も残すところ後一か月余りとなりました。皆様の今年の資産運用の成はいかがでしたでしょうか？

日本株は9月に31年ぶりの高値を付け、これで漸く失われた30年が終わり、新しい相場が始まるのかもしれないという期待感も生まれました。そんな遅ればせながらの日本株を尻目に、アメリカ株は連日のように史上最高値を更新しました。コロナが助長した金余りを背景にしたその熱狂に、世界的な冒険投資家や日本の長期投資のパイオリアは度重なる警告を発しましたが、アメリカ市場はそれらを嘲笑うかのように上値を追い続け現在に至っています。その強さを見るにつけ、「やっぱり投資するならアメリカ株だなあ」と感じ入った投資家も多いと思います。また、それらを組み入れた投資信託は爆発的な人気です。

しかしながら、よくよく見てみると、今年11月17日までの一年間の上昇率の比較では、日本のTOPIXは17.5%、アメリカのSP500は29.9%であったのに対し、インド株式市場を代表するSENSEX指数は36.6%だったのです。そうです。あれ程毎日「最高値更新！」と囃されたアメリカ株を、殆ど無視されたインド株の上昇率が上回ったのです。更に驚いのは、そのパフォーマンスはGAFAYやテスラが入っているハイテク株中心のナスダック指数(33.8%)をも凌駕したのです。

「そんなのたまたまだよ。コロナ感染者数が急減して、景気回復期待が過度に高まった短期的なバブルだよ。アメリカのテーパリングが始まれば新興国株には逆風さ」などとインド市場の可能性を真剣に考える人はほとんどいません。

私はそうは思いません。SENSEX指数の公表は1986年1月から始まりましたが、現在までの約36年間の上昇率は約109倍で、SP500の22倍、ナスダックの49倍を大きく凌いでいます。この間TOPIXは2倍にもなっていません。

インド株の強さは、その経済の成長性を背景にこのように長期に亘り圧倒的でした。でも、このことを日本のメディアも証券会社も全く報じていません。なぜなら彼らは商売上、情報入手が容易な日本株の短期的な変動や、AI、ロボティクス、電気自動車などに関連した煌びやかな、そして多くの投資家が持っているアメリカ株の動向しかほとんど話題にしようとしないからです。

「人生 100 年時代」になるからとしきりに長期の資産運用を推奨しながら、その実は余命数か月に対応したような情報しか提供されていないのが現状です。これからのインド経済は、この活かす通信で 2 年ほど前からお話ししてきましたように、かなり長期的に他国を遥かに上回る異次元の成長を遂げると予想されます。それを受けたインドの株式市場は、短期的に世界の金融緩和縮小の影響を多少受けたとしても、長期では益々投資妙味を増してくると思われれます。

★★

ムッシュ望月の映画ランキング+相場展望

映画は世につれ、世は映画につれ、世相を反映する相場

★★

1, 映画：フランス映画「ONODA」

10 月は 12 本を見、通算では 120 本となった。年間の目標が 120 本なので既に 100%達成したことになる。多分 150 本は可能と言える。10 月に印象に残った銘柄は、中山七里の東日本震災後に起きた事件の謎を解く社会派長編推理小説「護られなかった者たち」、中世フランスを舞台にした実話「最後の決闘裁判」、貯金が底をつく局面に遭遇した家庭を描いた「老後のお金はありません」、アメリカの同時多発テロの真実を暴く「モーリタニアン」、お馴染みのスパイアクション映画、ジェームズボンドシリーズ第 25 作のノー・タイム・トゥ・ダイ、司馬遼太郎の歴史小説の映画化「燃えよ剣」である。今回のお勧めは「ONODA 一万夜を超えて」、フランスの新鋭アルチュール・アラリ監督作品で 2021 年・第 74 回カンヌ国際映画祭「ある視点部門」出品し話題となった。太平洋戦争終結後も任務解除の命令を受けられず、約 30 年間フィリピン・ルバング島に潜伏、1974 年に 54 歳で帰国した小野田寛郎旧陸軍少尉のジャングルで壮絶な日々を描いた作品である。「私は平凡で小さな男である。命令を受け、戦って、死に残っただけの一人の敗残兵である」「私はいったいだれのために、何のために戦ってきたのか」と残した言葉が印象に残る作品である。

2、 相場展望：EV、半導体に政府は力点を！！

岸田内閣の布陣も決まり、いよいよ本格的な日本の政治経済のかじ取りが始まりました。現在の日本経済状況は引き続き厳しい状態にある。7～9月期の実質国内生産（GDP）は前期から年率3.0%と、プラス成長が続く欧米諸国とは大きな差が出ている。ワクチンの普及に手間取ることの影響を受け個人消費の持ち直しが鈍い。10～12月期はその反動により高成長を見込むが、日本のGDPがコロナ前の水準に戻るのには2022年以降になる公算が大きい。コロナ危機の出口に向けての成長力を底上げする構造改革も急がれる。10月末から11月15日までに上場企業の2022年3月決算（4月から9月）まで、中間地点の発表があり、純利益の合計額は前年同期の2倍と、同期間では過去最高となった。新型コロナウイルスの長期化の影響を受けて内需企業の苦戦が続いたが、海外需要や円安の影響を受けて自動車や電機と言った製造業は急回復し、需給ひっ迫や資源価格の高騰もあり商社や非鉄金属、コンテナ船の価格上昇の恩恵を受けた海運の利幅が拡大した。売上高利益率も4～9月期としては過去最高となり、全36業種中30業種で最終損益の改善が見られる。純利益は製造業が3.4倍、非製造業が43%増で、3社に1社が通期見通しを上方修正した。

トヨタの貢献度が大きく純利益は前年同期比2.4倍の1兆5244億円と2年ぶりの最高益で、一方ソフトバンクは大幅に利益が縮小し、その影響で通信部門は減益に評価された。五輪需要が一服した建設部門も一服状態で、空運については最終赤字が4割縮小したものの厳しい状態に変わりはない。日経平均を構成する銘柄の1株当たり利益の変化を見ると、2021年3月期は1594円、2021年9月18日時点では2175円、その後一旦2022円まで下がり、現在2089円まで回復してきた。日経平均のPERは14倍から16倍が標準であり、下値29246円から上値33424円と計算が出来る。ただ一旦9月18日時点で2175円まで織り込んだので、上値を追うには更なる業績が必要となる。政府はEV電池の国内生産を後押し、工場建設に1000億円の補助をつけることで2021年度補正予算に計上することになった。2020年のEV向け電池の生産量の世界シェアは、第1位が中国のCATLの24%、第2位は韓国のLGエナジーの23.5%、第3位がパナソニックの18.5%となっている。残念ながら19年に比べるとシェアを5.9%落としているだけに競争力を強化する必要がある。半導体関連・EV関連・DX関連・GX関連をポートフォリオの中心に置きたい。個別銘柄については、ICAS投資塾等でご紹介する。最近（8月以降継続）のヒット銘柄は田中化学研究所（4080）である。テンバーガー候補である。スタートは10月8日の安値860円。

★★

イカス通信発行人：特定非営利活動法人イカス www.toushi-club.com

*当メールマガジンについてのご意見は以下のメールにお願いします

メール：staff@toushi-club.com ☎：03-3432-5859 FAX:03-3432-5869

発行責任者：木下宇一郎

★★